

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370525

研究課題名(和文) 中世日本語仮名表記システムの解明

研究課題名(英文) Research and study of the kana-based writing system in medieval Japanese

研究代表者

齋藤 達哉 (SAITO, TATSUYA)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：90321546

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：平安期に発生した仮名による表記システムは、鎌倉期以降に実用性が付加されながら変化していく。本プロジェクトでは、仮名を用いて実用目的で書かれ、武家層の女性に読まれた文献(例えば、仮名書き法華経など)を調査することで、中世日本における仮名表記システムの実用的変化の一端を見出すことを試みた。

このプロジェクトで実施できたことは、(1)仮名書き法華経の研究用データの整備及びインターネットでの公開、(2)仮名表記システムに関わる検証・探索(位置による同音仮名の使い分けについての検証、異体仮名の字形選択条件についての検証、仮名文に定着しがちな漢字の条件についての探索)及び成果の公表である。

研究成果の概要(英文)：The writing system using kana, or syllabic Japanese letters, established in the Heian period evolved while being enhanced in practicality through the Kamakura and subsequent periods. This project aimed to gain an insight into the practical evolution of the kana-based writing system in medieval Japan by examining literary works, such as KANAGAKI-HOKEKYO, written using kana for practical purposes and read by women in BUKE families. There are two achievements by this project: (1) preparation of the electronic text of KANAGAKI-HOKEKYO and its disclosure on the Internet, and (2) verification and searches conducted in connection with the kana-based writing system and the publication of the results.

研究分野：日本語学

キーワード：文字・表記 日本語史 仮名表記 漢字表記

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 研究動向：文字・表記史への注目度

国内では、日本語学会(2012年春季)において仮名に関する部会が開かれるなど、関心は高まっていた。

海外でも、David Lurie 氏(米国・コロンビア大学)によって、日本語表記史を世界の文字史の中で捉えた研究成果(Lurie, David. *Realms of literacy: early Japan and the history of writing*. Harvard University Asia Center, 2011.) がなされる刊行など、文字・表記史に対する関心が高まっていた。

こうした中で、《平安期に発生した仮名表記が、鎌倉期以降に広く普及した際、実用性・合理性を求めた結果、どのように変化したのか》という課題については未解明な点が多かった。

### (2) これまでの経緯

研究代表者は、連携研究者たちと研究活動を行う中で、鎌倉期～江戸初期にかけての仮名表記史研究として、物語写本を資料にした研究を行ってきた(下記)。

○平成 21 年度 国立国語研究所共同研究プロジェクト「仮名写本による文字・表記の史的研究」(斎藤達哉、高田智和他)

○平成 22～24 年度 人間文化研究機構連携研究「海外に移出した仮名写本の緊急調査」(高田智和、小木曾智信、斎藤達哉他)

○平成 22～24 年度 科学研究費補助金基盤研究(A)「日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究」(課題番号：22242010、代表者：今西祐一郎、連携研究者：斎藤達哉)

この一連の研究の中で、斎藤は、マクロな視点では、時代が下ると[漢字含有率が高くなること]と[異体仮名種類数が減少すること]とを確認した。

しかし、ミクロな視点で「語と表記との関係」を見たときに、物語や和歌が抱える資料的問題点にも直面した。物語や和歌の仮名表記は、書写時に美的・芸術的な要素(書としての美しさ)が付加されるという特殊性を持っている。さらに、物語や和歌は、原典が平安期で、それを鎌倉期以降に書写した写本である。平安期の表記と鎌倉期の表記とが重層的に混在しているため、それらを選別し、時代ごとの表記の特徴として整理することが極めて困難である。

中世の仮名表記システムを知るためには、美的・芸術的要素の付加が少なく実用目的を伴って書かれた文字資料を用いた調査が望まれるという視点を持つに至った。

## 2. 研究の目的

本研究は、平安期に発生した仮名表記システムが、鎌倉期以降に実用性・合理性を求め

た結果、どのように変化したのかについて、文字資料を調査・研究することで明らかにすることを目的としている。

従来、扱われてきた和歌・物語等は、表記の際に美的・芸術的要素が付加されるために、表記上の普遍性を見出しにくいという難点がある。本研究では、《仮名を用いて実用目的で書かれ、武家層の女性に読まれた文字資料》例えば、「仮名書き法華経」などを資料としながら調査・研究することで、中世における仮名文字表記の実用的変化の一端を見出すことを試みた。

## 3. 研究の方法

研究緒遂行に当たっては、初年度である平成 25 年度(2013 年度)は、仮名書き法華経の研究用データを整備することから始めた。

研究用データが一定量(約3割)得られた2年目からは、研究用データの整備と並行ながら、《位置による同音仮名の使い分けについての検証》、《異体仮名の字形選択条件についての検証》、《仮名文に定着しがちな漢字の条件についての探索》の3点について、調査・研究を行った。

整備したデータは、研究室のホームページで公開し、調査・研究の結果は、論文及び海外での口頭発表によって公表した。

## 4. 研究成果

本研究で実施できたことは次のことである。

○仮名書き法華経の研究用データを整備及びインターネットでの公開

○仮名表記システムに関わる検証・探索(位置による同音仮名の使い分けについての検証、異体仮名の字形選択条件についての検証、仮名文に定着しがちな漢字の条件についての探索)及び成果の公表

### (1) 仮名書き法華経の研究用データの整備及び公開

足利本仮名書き法華経の字母翻字データの作成

足利本仮名書き法華経の、漢字箇所や仮名字母についてタグを付加した翻字データを作成し、公開した。

平成 25 年度(2013 年度)に試験的に第 6・7・8 軸の字母翻字データを作成し、報告書『足利本「仮名書き法華経」翻字と仮名字母の集計 第六・七・八軸』(2014.3)を作成した。それに改良を加えて、平成 28 年度(2016 年度)末までに全 8 軸の字母翻字データを完成させた。このデータは、「専修大学文学部 斎藤研究室」HP で公開している。

(<http://mojilabo.com/>)

## 江戸期板本仮名書き法華経の調査

ハーバード大学燕京図書館において、摩尼園訓読法華経（文政8年刊）の書誌調査を行うとともに、全巻を撮影し、研究の参考とした。

### (2) 仮名表記システムに関わる検証・探索及び成果の公表

位置による同音仮名の使い分けについての検証

近年の研究では、同音の異体仮名には「使い分け」ではなく「傾向差があるに過ぎない」と見るむきがある。

「使い分け」という見方の背景にあったのは『悦目抄』類の歌書の記述である。しかし、『悦目抄』類に見える「位置による同音仮名の使い分け」の記述は、伝本間で内容に揺れが見られ、どの本の記述が正しいのか詳らかではない。

斎藤（2015）「悦目抄とその前後 字形の誤認識と用字意識の誤類推修正」では、悦目抄とその前後の書（和歌三重之大事、和歌大綱）とを比較することによって、次のことを明らかにした。

仮名字形の誤類推によって、別音の仮名を発生させている事例が多数見られる

誤類推による修正が見られるため、伝本に記述に整合性があつたとしても、それが古態とは言えない

同字母異体の対立は、「位置による仮名の使い分け」のオリジナルには存在しなかった可能性が考えられる

同音の仮名の明確な使い分け意識（棲み分け意識）は、和歌三重之大事には見られず、転写を重ねる中で修正された結果と考えられる

誤認識や誤類推修正の裏にある根本的な原因は、仮名を単字で掲示したことにより、「位置による仮名の使い分け」の記述は仮名の弱点を隠さずとも露呈させてしまっている

このことから、「位置による同音仮名の使い分け」に関する記述は、後世に作られた規範意識であり、中世の仮名表記システムとは異なるものであることが確認できた。

### 異体仮名の字形選択条件についての検証

実用目的を伴って書かれた文字資料である足利本仮名書き法華経は、異体仮名の比率が軸によって異なり、原本での分担書記者は3人以上であると想像される。これを踏まえたうえで、斎藤（2016）「足利本仮名書き法華経の異体仮名 八の異体仮名の書記傾向」では、八の仮名をサンプルとして、異体仮名の書記傾向について整理・報告をした。

「多変量解析システム Seagull-Stat」（早狩進氏開発）を用いて因子分析した結果、次のことが分かった。

八の異体仮名の選択は、前後の文字の字

形とは関係があるとは言えない。

ただし、先行する文字との関係で、濁音かそれ以外の音かによって、「半」「盤」か「八」かに分かれる傾向が見いだせたり、後続する文字との関係で特定の語に固定した用字がなされたりすることはある。

八の異体仮名の連綿率には差がある。助詞専用の傾向の仮名では、先行文字との連綿し易さについて、頻度の高さとの関連を見る必要がある。後続文字への連綿し易さについては、意味的単位での分節機能との関連を見る必要がある。

表1 後続文字への連綿

	後続文字に連綿する		後続文字に連綿しない		行末なので連綿はない	
	(頻度)	(%)	(頻度)	(%)	(頻度)	(%)
は	2	0.3%	693	90.2%	73	9.5%
盤	0	0.0%	33	97.1%	1	2.9%
半	2	11.8%	14	82.4%	1	5.9%
者	1300	65.6%	621	31.3%	60	3.0%
八	348	36.9%	506	53.7%	88	9.3%

表2 先行文字からの連綿

	先行文字から連綿する		先行文字から連綿しない		行頭なので連綿はない	
	(頻度)	(%)	(頻度)	(%)	(頻度)	(%)
半	0	0.0%	16	94.1%	1	5.9%
盤	2	5.9%	31	91.2%	1	2.9%
八	2	0.2%	896	95.1%	44	4.7%
者	668	33.7%	1196	60.4%	117	5.9%
は	214	27.9%	533	69.4%	21	2.7%

このことから、仮名資料におけるの字体選択は、連綿との関わりに着目した探求の必要性が判明した。

仮名文に定着しがちな漢字の条件についての探索

どのような性質の漢字から日本語文に定着していったのかという問題については、あまり検討されていない。

そこで、斎藤（2016）「漢字はどのようにして日本語文に定着したのか 鎌倉期仮名書き法華経と仮名文の漢字との比較・対照から」では、鎌倉期の仮名書き法華経の使用漢字を例にして、平安期から室町期の仮名文の使用漢字と比較・対照することで、古代日本語文の書記における漢字使用の広がり方（定着度）について考察した。仮名書き法華経は、漢字文（中国語文）を訓読したものである。足利本仮名書き法華経の使用漢字には、原文から引き継いだものと、訓読文に新たに当てたものがあるが、便宜的に、定着度別に以下の4段階に分類した。

定着度1...仮名文において平安期から使用が見られる漢字

定着度2...仮名文において鎌倉期から使用が見られる漢字

定着度3...仮名文において室町期から使用が見られる漢字

定着度4...仮名文では、使用が見られない漢字

足利本の使用漢字には、定着度別に、以下の傾向を見出すことができる。

足利本で使用された漢字のうち、平安期仮名文から使用が見られるもの(定着度1)は、《数量語として用いられる漢字》《訓よみ(とりわけ熟字訓)で用いられる漢字》という特徴をもつ

足利本で使用された漢字のうち、鎌倉期仮名文から見られるもの(定着度2)は、《音読みによる仮借として用いられる漢字》《訓よみで用いられる漢字》《訓よみだけが用いられる漢字》《訓よみによる当て字に用いられる漢字》という特徴をもつ

足利本で使用された漢字のうち、仮名文に使用が見られないもの(定着度4)は、《表記される語に偏りが見られる漢字》《梵字音写専用だけに用いられる漢字》という特徴をもち、仮名書き法華経という資料特性上、高頻度になった漢字と考えられる

以上から、漢字が仮名文に定着するためには、数量語として用いられる記号性に加え、《訓よみが定着していること》や、《音よみの転用が可能であること》という性質が必要であったことが確認できた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

齋藤 達哉、足利本仮名書き法華経の異体仮名 八の異体仮名の書記傾向、専修人文論集、査読無、No.98、2016.3、pp.405-420

齋藤 達哉、悦目抄とその前後 字形の誤認識と用字意識の誤類推修正、専修人文論集、査読無、No.96、2015.3、pp.183-208

〔学会発表〕(計1件)

○齋藤 達哉、漢字はどのようにして日本語文に定着したのか 鎌倉期仮名書き法華経と仮名文の漢字との比較・対照から、第11回日本語教育・日本研究シンポジウム(主催:香港日本語教育研究会)、2016.11.20、於:香港公開大学(中国・香港)

〔図書〕(計1件)

○齋藤 達哉、専修大学文学部齋藤研究室、足利本「仮名書き法華経」翻字と仮名字母の集計 第六・七・八軸、2014.3、175

〔その他〕

○ホームページ等

<http://mojilabo.com/>

「専修大学文学部 齋藤研究室」HPで、(1)

「足利本仮名書き法華経」字母データ、(2)

「仮名文字研究文献一覧」を公開した。

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

齋藤 達哉 (SAITO, Tatsuya)

専修大学・文学部・教授

研究者番号: 90321546

(2)研究分担者

該当者なし

(3)連携研究者

高田 智和 (TAKADA, Tomokazu)

人間文化研究機構国立国語研究所・言語変化研究領域・准教授

研究者番号: 90415612

小木曾 智信 (OGISO, Toshinobu)

人間文化研究機構国立国語研究所・言語変化研究領域・教授

研究者番号: 20337489

(4)研究協力者

David Lurie

コロンビア大学・東アジア言語文化学科・准教授